

21 世紀社会に取り組む
——政策志向の社会学をめざして——



2008 年度上村ゼミ論文集

名古屋大学文学部社会学研究室

はしがき

昨春名古屋大学に着任してからしばしば、勉強と研究は別物だと学生諸君に力説している。名大生の多くはそれなりに勉強ができるので、勉強だけではだめだと伝える必要を感じたからである。勉強とは既知のことがらを学習することであり、研究とは未知のことがらを発見することである。勉強は地道にまじめに取り組めばそれなりの成果が出るが、研究には自主性と飛躍が不可欠であり、教科書や教師の言葉通りには進まない。

研究はもの好きな学者の専売特許ではない。研究者志望でない学生諸君にとって、研究とは、未知の課題に取り組む勇気を鍛錬する機会にほかならない。ちなみに名古屋大学は「勇気ある知識人」を育てることになっているが、もちろん「勇を好んで学を好まざればその蔽や乱」（論語）である。勇気には、洗練された思考力と判断力がともなっていなければならない。その思考力と判断力は、論文を書くことで養われる。試験前日に覚えた社会学の用語体系は卒業後すぐにも忘れるだろうが、論文執筆時に自ら組み立てた概念で研究対象をねじ伏せた経験は生涯の糧となって残るはずである。

以上のことは私の創見ではない。近代大学の模範とされるベルリン大学の創設者、フイヒテやフンボルトが 200 年も前に提唱したことを祖述しているだけである。研究は日進月歩でなければならないが、大学の理念は 200 年前と少しも変わらない。この論文集もそのような趣旨から刊行される。掲載論文のうちいくつかは、研究の名に値するものである。そうした論文に触発されて、読者もまた研究に着手することになれば幸いである。

2009 年 4 月 12 日

上村 泰裕

目次

【学年末論文】

介護福祉における感情労働	(根本さやか)	1
発達障害者支援法の意義	(石原沙織)	11
在日外国人の子育て支援へのアクセス	(今井優作)	21
職場環境が女性のキャリア継続に及ぼす影響	(印藤早絵子)	30
中高年男性貧困層に対するワークシェアリングの有効性	(竹中理恵)	41
集合住宅における共同生活	(吉田匡宏)	53
都市における人々と音の関係	(杉本健治)	63
博物館・美術館の目的とは何か	(辻里子)	72
スポーツシーンにおける女性役割	(眞田夏美)	79
オーストラリアの多文化主義	(伊藤愛)	89

【卒業論文】

男性介護者のネットワーク	(堀江美穂)	102
障害者雇用を支える社会	(石原満帆)	173
オリジナル・ウェディングの社会学	(川畑有希恵)	215
大学生によるウェブログ公開行動	(山崎茜)	264

21世紀社会に取り組む——政策志向の社会学をめざして
2008年度上村ゼミ論文集

2009年4月24日 印刷・発行
名古屋大学文学部社会学研究室
464-8601 名古屋市千種区不老町 780
e-mail kamimura@lit.nagoya-u.ac.jp